

# 幼児にふさわしいと考える関わり方の意識が 幼児期の被養育・被保育体験から受ける影響並びに 幼児への実際に関わり方の意識に与える影響

成田 鮎子\*・吉澤 千夏\*\*

(令和3年1月29日受付；令和3年4月28日受理)

## 要 旨

本研究は、対象者の幼少期の被養育・被保育体験が、対象者が考える幼児にふさわしい関わり方の意識をいかに形成し、さらにその意識がどのような実際の幼児への関わり方と結びついているのかを明らかにするために、大学生の幼少期の被養育・被保育体験及び実際の幼児への関わり方並びに対象者が幼児にふさわしいと考える関わり方の意識の関連を捉えた。幼児期に被養育・被保育体験がある大学生を対象とし、自身の幼少期の被養育・被保育体験及び現在の幼児への関わり方の想起並びに幼児にふさわしいと考える関わり方の評価に関する調査を行い、回答を得て、それらの関係について相関分析を行った。分析の結果、以下のことが明らかになった。

(1) 対象者の幼少期の養育者による、子どものペースを大事にした、表情豊かで愛情を持った関わりは、現在の対象者が幼児にふさわしいと考える関わり方の意識における同様の項目と有意な相関がみられるものの、関連の程度は極めて弱い。

(2) 対象者の幼少期の保育者による、安全性に配慮した関わりは、現在の対象者が幼児にふさわしいと考える関わり方の意識における同様の項目と弱いものの相関がみられる。しかし、幼少期に保育者から受けた、自らを尊重し、自立を支援する関わりは、対象者が幼児にふさわしいと考える関わり方の意識における同様の項目と有意な相関が認められるものの、その関連の程度は極めて弱い。

(3) 現在の保育観を示す「幼児にふさわしいと考える関わり方の意識」の形成において、養育者・保育者による養育・保育は影響を及ぼすものの、それぞれから対象者が受ける影響の内容は異なる。このことから、保育観の形成に対して、養育と保育にはそれぞれ異なる意義があるものと推察される。

(4) 養育・保育を行う際の理想とも言える「幼児にふさわしいと考える関わり方の意識」と現実を示す「実際の幼児への関わり方」では、「表情豊かに接する」「目の高さを合わせて接する」に相関がみられるものの、その関連の程度は極めて弱い。

## KEY WORDS

university student 大学生, child 幼児, early childhood 幼児期, experience of being raised 被養育・被保育体験, attitude towards children 幼児への関わり

## 1. 緒言

本稿は、幼少期の被養育・被保育体験が養育者・保育者への好感度や自身の幼児への関わり方に与える影響を分析した研究<sup>(1)</sup>を受け、自身が受けた養育・保育の体験や自身の幼児への関わり方が、対象者の保育観を示す、幼児にふさわしい関わり方とどのように関連しているのかを明らかにしようとするものである。

先の研究<sup>(2)</sup>において、対象者の多くは幼少期・現在のいずれにおいても養育者・保育者への好感度は高く、その養育者・保育者からの自身に対する養育・保育は情緒的で受容的であったと評価していることが明らかになっている。さらに、その養育者・保育者が幼児にふさわしいとされる関わり方をするのが、その対象者の養育者・保育者に対する好感度を高めること、対象者自身が養育者や保育者から幼児にふさわしいと考えられる関わり方をされたことと認識することが、対象者自身の現在の幼児に対する関わり方に影響することが示されている。この一連の結果は、家族との関わりが子どもイメージの良好さに影響<sup>(3)</sup>したり、子どもと関わる際の振る舞いに伝承<sup>(4)</sup>したりするといった先行研究の結果を支持するものである。その一方で、これらの関わり方は、いわば慣習や文化として伝承しているとも考えられ、それが幼児の育ちにとって重要な意味を持つという理解に結びついているかは明らかにされていない。慣

\*上越市立戸野目小学校 \*\*自然・生活教育学系

習、文化として幼児にふさわしいと考えられる関わり方が伝承されているのであれば、具体的な養育・保育場面は十分に成立するとも考えられる。しかし、その関わり方が幼児にふさわしいとされる意識が理解されぬまま伝承されることは、それらが幼児にふさわしいから行う、または伝承するといった行動に結びつかず、その関わり方のみが形式的に伝達され、延いてはその関わり方が形骸化及び変質し、幼児にふさわしいものではなくなる可能性をも秘めている。このことから、幼児にふさわしいと考える関わり方の意識が自身の幼少期の被養育・被保育体験や現在の幼児に対する実際の関わり方とどのような関連があるかを捉えることは、子どもと関わる者が幼児に対して行う関わり方の持つ意味を理解し、その上で子どもと関わっているか否かを図る指標ともなり得る。

そこで本研究は、対象者の幼少期の被養育・被保育体験が、対象者が考える幼児にふさわしい関わり方の意識をいかに形成し、さらにその意識がどのような実際の幼児への関わり方と結びついているのかを捉えるために、大学生の幼少期の被養育・被保育体験及び実際の幼児への関わり方の想起並びに対象者が幼児にふさわしいと考える幼児との関わり方についての調査を行い、その分析を通して、それらの関連を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象

対象者は新潟県内のJ大学に在学し、学部1年生の必修科目「家庭」を受講する学生215名である。

### 2.2 調査方法

調査時期は2016年6月である。上記の講義終了後に無記名式調査用紙を配布し、その場で回答するよう依頼した後、回収を行う。

### 2.3 調査紙の構成

調査紙は、以下の内容で構成されている。

①対象者の属性：対象者の性別、学年、年齢、子どもの有無、幼児との接触頻度。

②対象者の幼少期における養育者からの被養育体験

幼児との関わり方についての項目は、中学校における「家庭」の学習との関連を考慮し、「中学校学習指導要領解説編 家庭」<sup>⑤</sup>と中学校家庭教科書「技術・家庭 家庭分野」<sup>⑥⑦⑧</sup>の「家族・家庭と子どもの成長」の該当箇所内にある「幼児との関わりにおいて気をつけること」についての内容を基に作成する。項目数は全14項目である（表1）。ここでは、対象者にとって最も身近な養育者及び保育者が対象者にどのように関わったかを「とてもよく当てはまる」を「5」、「まったく当てはまらない」を「1」とする5件法による回答を求める。

③対象者の幼少期における保育者からの被保育体験

幼児期の対象者と関わりを持っていた保育者を想起し、その保育者が対象者にどのように関わったかを「とてもよく当てはまる」を「5」、「まったく当てはまらない」を「1」とする5件法による回答を求める。

④対象者自身が幼児にふさわしいと考える幼児との関わり方

対象者自身が子どもと関わる上で、「幼児にふさわしいと考えるかかわり方」について、表1の14項目から特に重要だと思うもの3つを選択することを求める。

⑤対象者自身の幼児との関わり方

対象者自身が幼児と関わる際の実際の関わり方について、「とてもよく当てはまる」を「5」、「まったく当てはまらない」を「1」とする5件法で自己評価し、その回答を求める。

本調査紙ではその他にも、「保育者は身近な存在であったか」「養育者・保育者への好感度」「保育体験等での年少者との関わり」の質問も行っている。しかし本稿ではその点については言及しないため、これらの説明は省略する。

表1 「中学校学習指導要領解説編 家庭」（文部科学省）及び「技術・家庭 家庭分野」（教育図書）による幼児との関わり（14項目）<sup>⑨</sup>

幼児のペースを大事にする	分かりやすい言葉で話す	幼児を認める言葉をかける
表情豊かに接する	楽しく遊べるように工夫する	目の高さを合わせて接する
忍耐強く付き合う	幼児の意思を尊重する	個人差や個性を認める
年齢・年齢に応じて関わる	危険を取り除く	幼児の自立の手助けをする
愛情を持って関わる	その子に合った関わりをする	

### 3. 結果及び考察

#### 3.1 対象者の属性

対象者は男性118名 (54.9%)、女性96名 (44.7%)、平均年齢は19.5歳 (SD=2.2) である。また、対象者はすべて「子どもがいない」者である。

対象者の幼少期における最も身近な養育者について、最も多いのは「母」の168名 (78.1%) で、次いで「祖母」30名 (14.0%)、「父」9名 (4.2%)、「祖父」が4名 (1.9%)、である。またその他に、「父母」が1名 (0.5%)、「祖父母」が3名 (1.4%) である。

#### 3.2 幼少期の被養育体験と幼児にふさわしいと考える関わり方の意識に関する相関分析

先に述べたように、幼少期の被養育・被保育体験と自身の幼児への関わり方には関連があり、被養育・被保育体験は大学生の幼児への実際の関わり方に投影される一面があることが明らかになっている<sup>(10)</sup>。このことは、養育者や保育者の幼児への関わり方が、その関わられた当事者が成長後、幼児に対していかに関わるのか、という保育観に影響を与えていることを示している。しかし、その被養育・被保育体験が、養育・保育を受けた自身の養育・保育観とどのように関連しているかについては、明らかにされていない。そこで本稿では、幼少期の被養育・被保育体験が現在の保育観、すなわち幼児にふさわしいと考える関わり方の意識に影響を及ぼすという仮説に基づき、これらについて相関分析を行う。

まず、対象者が受けた幼少期の被養育体験の認識と、対象者が幼児にふさわしいと考える関わり方の意識に関連があるかを明らかにするために、「その人 (主たる養育者) はあなたにどう関わりましたか」と「幼児が健全に成長するために、あなたがふさわしいと考える幼児への関わり方について、特に重要だと思うものを3つ選び、○をしてください」の回答について、「私のペースを大事にした」-「幼児のペースを大事にする」のように、同様の意味を持つ項目間での相関分析を行う。

分析の結果、対応する項目間で有意な正の相関が認められたのは、14項目中、「わたしのペースを大事にした」-「幼児のペースを大事にする」(p=.024)、「表情豊かに接した」-「表情豊かに接する」(p=.020)、「愛情を持って関わった」-「愛情を持って関わる」(p=.013) の3組である (表2)。「幼児のペースを大事にする」のように幼児の発達に丁寧に対応し、幼児に対して「表情豊かに接する」「愛情を持って関わる」ことについて、被養育体験と自

表2 被養育体験と幼児にふさわしいと考える関わり方の意識 (保育観) との関連

n=213

その人 (主たる養育者) はあなたにどう関わりましたか (被養育体験)			
幼児が健全に成長するために、あなたがふさわしいと考える			
幼児への関わり方について、特に重要だと思うものを3つ選び、○をしてください (保育観)			
被養育体験	わたしのペースを大事にした	分かりやすい言葉で話した	わたしを認める言葉をかけた
保育観	幼児のペースを大事にする	分かりやすい言葉で話す	幼児を認める言葉をかける
相関係数	.154*	-.040	.105
有意確率	.024	.564	.126
被養育体験	表情豊かに接した	楽しく遊べるように工夫した	目の高さを合わせて接した
保育観	表情豊かに接する	楽しく遊べるように工夫する	目の高さを合わせて接する
相関係数	.159*	.039	.075
有意確率	.020	.574	.275
被養育体験	忍耐強く付き合った	わたしの意思を尊重した	個人差や個性を認めた
保育観	忍耐強く付き合う	幼児の意思を尊重する	個人差や個性を認める
相関係数	.092	.049	.040
有意確率	.181	.478	.557
被養育体験	月齢・年齢に応じて関わった	危険を取り除いた	わたしの自立の手助けをした
保育観	月齢・年齢に応じて関わる	危険を取り除く	幼児の自立の手助けをする
相関係数	.074	.120	.046
有意確率	.280	.079	.501
被養育体験	愛情を持って関わった	わたしに合った関わりをした	
保育観	愛情を持って関わる	幼児に合った関わりをする	
相関係数	.169*	-.025	
有意確率	.013	.716	

\* : p<.05, \*\* : p<.01

身が幼児にふさわしいと考える関わり方に関連があることが示唆される。

次に、その相関の強さに着目すると、「わたしのペースを大事にした」-「幼児のペースを大事にする」では.154、「表情豊かに接した」-「表情豊かに接する」では.159、「愛情を持って関わった」-「愛情を持って関わる」では.169であり、いずれにおいても相関係数の値は低い。このことから、幼少期、養育者が自分に対して丁寧に、かつ表情豊かに愛情をもって関わった養育態度について、対象者が青年となった今、幼児と関わる上で特に重要な関わり方であると評価しつつも、その関連は極めて弱いと言える。

### 3.3 幼少期の被保育体験と幼児にふさわしいと考える関わり方の意識に関する相関分析

次に、幼少期の被保育体験と現在の幼児にふさわしいと考える関わり方の意識との関連を明らかにするために相関分析を行う。対象者が受けた幼少期の被保育体験の認識と、対象者が幼児にふさわしいと考える関わり方の意識に関連があるかを明らかにするために、「その人（保育士・幼稚園教諭）はあなたにどう関わりましたか」と「幼児が健全に成長するために、あなたがふさわしいと考える幼児への関わり方について、特に重要だと思うものを3つ選び、○をしてください」の回答について同様の意味を持つ項目間での相関分析を行う。

分析の結果、対応する項目間で有意な正の相関が認められたのは、14項目中、「わたしの意思を尊重した」-「幼児の意思を尊重する」(p=.007)、「危険を取り除いた」-「危険を取り除く」(p=.003)、「わたしの自立の手助けをした」-「幼児の自立の手助けをする」(p=.015)の3項目である(表3)。これらは、幼児と関わる際に安全を配慮して「危険を取り除く」ことをし、「幼児の意思を尊重する」とともに、「幼児の自立の手助けをする」関わり方において、被保育体験と自身が幼児にふさわしいと考える関わり方に関連があることが示唆される。

次に、その相関の強さに着目すると、「危険を取り除いた」-「危険を取り除く」では.205と弱い相関が認められるものの、「わたしの意思を尊重した」-「幼児の意思を尊重する」では.184、「わたしの自立の手助けをした」-「幼児の自立の手助けをする」では.166であり、いずれにおいても相関係数の値は低い。このことから、幼少期、保育者が安全な環境を整え、幼児の意思を尊重し、自立を支援する保育態度について、対象者が青年となった今、「危険を取り除く」といった安全性への配慮の点では一定の関連はみられるものの、幼児の意思の尊重や自立の支援といった点では、幼児と関わる上で特に重要な関わり方であると評価しつつも、その関連は極めて弱いと言える。

表3 被保育体験と幼児にふさわしいと考える関わり方の意識（保育観）との関連

n=213

保育士・幼稚園教諭はあなたにどう関わりましたか（被保育体験）			
幼児が健全に成長するために、あなたがふさわしいと考える 幼児への関わり方について、特に重要だと思うものを3つ選び、○をしてください（保育観）			
被保育体験	わたしのペースを大事にした	分かりやすい言葉で話した	わたしを認める言葉をかけた
保育観	幼児のペースを大事にする	分かりやすい言葉で話す	幼児を認める言葉をかける
相関係数	.041	.074	.129
有意確率	.550	.280	.060
被保育体験	表情豊かに接した	楽しく遊べるように工夫した	目の高さを合わせて接した
保育観	表情豊かに接する	楽しく遊べるように工夫する	目の高さを合わせて接する
相関係数	.101	-.100	.099
有意確率	.140	.143	.148
被保育体験	忍耐強く付き合った	わたしの意思を尊重した	個人差や個性を認めた
保育観	忍耐強く付き合う	幼児の意思を尊重する	個人差や個性を認める
相関係数	-.017	.184**	-.033
有意確率	.808	.007	.628
被保育体験	月齢・年齢に応じて関わった	危険を取り除いた	わたしの自立の手助けをした
保育観	月齢・年齢に応じて関わる	危険を取り除く	幼児の自立の手助けをする
相関係数	.027	.205**	.166*
有意確率	.697	.003	.015
被保育体験	愛情を持って関わった	わたしに合った関わりをした	
保育観	愛情を持って関わる	幼児に合った関わりをする	
相関係数	-.018	.097	
有意確率	.794	.155	

\* : p<.05, \*\* : p<.01

上記、3. 2及び3. 3の結果から、それぞれ14項目中3項目において有意な正の相関が認められる。このことは、養育者・保育者から受けた養育・保育と、対象者が幼児の健全な成長のために特に重要視する関わり方には、部分的に関連があり、被養育・被保育体験が青年期の保育観に影響することが示唆される。しかし、有意な相関が認められる項目に注目すると、養育者との関連においては、「わたしのペースを大事にした」-「幼児のペースを大事にする」、「表情豊かに接した」-「表情豊かに接する」、「愛情を持って関わった」-「愛情を持って関わる」の3項目、保育者との関連においては、「わたしの意思を尊重した」-「幼児の意思を尊重する」、「危険を取り除いた」-「危険を取り除く」、「わたしの自立の手助けをした」-「幼児の自立の手助けをする」の3項目であり、それぞれにおいて相関のみられる項目は異なる。このことは、幼児にふさわしいと考える関わり方の意識、つまり保育観は、養育者と保育者からそれぞれ異なる影響を受けていることを示している。具体的には、幼児に対して丁寧に関わり、表情豊かに愛情をもって関わる態度については養育者から影響を受ける一方で、幼児に対して安全な環境を整え、幼児の意思を尊重し、自立を支援する関わり方については保育者から影響を受けていることが示唆される。以上のことから、現在の幼児にふさわしいと考える関わり方の意識の形成において、養育者・保育者から対象者が受ける影響は異なり、保育観の形成においては、養育者・保育者が行う養育・保育それぞれに異なる意義があるものと推察される。

### 3. 4 幼児にふさわしいと考える関わり方の意識と実際の幼児への関わり方に関する相関分析

先の研究<sup>(1)</sup>から、幼少期の被養育・被保育体験と自身の幼児への関わり方には関連があることが示されるとともに、前項までの分析から、幼少期の被養育・被保育体験と幼児にふさわしいと考える関わり方の意識（保育観）にも関連があることが示唆されている。このことは、養育者や保育者による養育・保育が、その関わりを受ける対象者の、その後の幼児に対する実際の関わり方やその意識に影響を及ぼすことを意味している。しかしこれらは、いわば幼児への関わり方における理想と現実の側面を示しており、必ずしもそれらが一致しているとは限らない。そこで本項では、対象者が幼児にふさわしいと考える関わり方の意識と実際の自身の幼児への関わり方の認識に関連があるか検討するために、「幼児が健全に成長するために、あなたがふさわしいと考える幼児への関わり方について、特に重要だと思うものを3つ選び、○をしてください」と「これまでのあなたの幼児との関わり方についてお聞きします。

表4 幼児にふさわしいと考える関わり方の意識と実際の幼児への関わり方との関連

n=213

幼児が健全に成長するために、あなたがふさわしいと考える 幼児への関わり方について、特に重要だと思うものを3つ選び、○をしてください（保育観） これまでのあなたの幼児との関わり方についてお聞きします。各内容について当てはまるものに○をしてください （実際の関わり方）			
保育観	幼児のペースを大事にする	分かりやすい言葉で話す	幼児を認める言葉をかける
実際の関わり方	幼児のペースを大事にする	分かりやすい言葉で話す	幼児を認める言葉をかける
相関係数	.029	.074	.055
有意確率	.678	.283	.422
保育観	表情豊かに接する	楽しく遊べるように工夫する	目の高さを合わせて接する
実際の関わり方	表情豊かに接する	楽しく遊べるように工夫する	目の高さを合わせて接する
相関係数	.159*	.043	.189**
有意確率	.020	.529	.006
保育観	忍耐強く付き合う	幼児の意思を尊重する	個人差や個性を認める
実際の関わり方	忍耐強く付き合う	幼児の意思を尊重する	個人差や個性を認める
相関係数	.089	-.064	.040
有意確率	.197	.353	.558
保育観	月齢・年齢に応じて関わる	危険を取り除く	幼児の自立の手助けをする
実際の関わり方	月齢・年齢に応じて関わる	危険を取り除く	幼児の自立の手助けをする
相関係数	.031	.095	.055
有意確率	.658	.167	.428
保育観	愛情を持って関わる	幼児に合った関わりをする	
実際の関わり方	愛情を持って関わる	幼児に合った関わりをする	
相関係数	.092	.025	
有意確率	.181	.721	

\* : p<.05, \*\* : p<.01

各内容について当てはまるものに○をしてください」の回答について、同様の意味を持つ項目間での相関分析を行う。

分析の結果、対応する項目間で有意な正の相関が認められたのは、14項目中、「表情豊かに接する」-「表情豊かに接する」( $p=.020$ ), 「目の高さを合わせて接する」-「目の高さを合わせて接する」( $p=.006$ )の2項目である(表4)。これらは、「表情豊かに接する」「目の高さを合わせて接する」のように具体的な行動を示す項目であると同時に、幼児との関係性や場面といった条件に関わらず、幼児と接する際に重視される事項である。また、これらの項目は具体的かつ幼児との関わり方において行動に移すことが容易であると考えられる。このことから、これらの項目は幼児にふさわしい関わり方として認識されるとともに、現在の自分の幼児への関わり方において実践しやすいために、相関が認められたと考えられる。

次に、その相関の強さに着目すると、「表情豊かに接する」-「表情豊かに接する」では.159, 「目の高さを合わせて接する」-「目の高さを合わせて接する」では.189であり、いずれにおいても相関係数の値は低い。このことから、幼児に対して表情豊かに関わり、目の高さに合わせて接することについては、その理想と現実において一定の関連はみられるものの、その関連は極めて弱いと言える。

以上のことから、対象者が幼児期に養育者や保育者から受けた養育・保育は、対象者の現在の「幼児にふさわしいと考える関わり方の意識」と一定の関連を持つことが明らかにされるとともに、養育者・保育者から影響を受ける「幼児にふさわしいと考える関わり方の意識」はそれぞれ異なることが示される。また、「幼児にふさわしいと考える関わり方の意識」は対象者の実際の幼児への関わりと関連があるものの、その関連は極めて弱いことが明らかとなる。このことから、対象者が持つ「幼児にふさわしいと考える関わり方の意識」は、幼少期の養育や保育の体験に影響を受けつつも、その後の幼少期の子どもたちとの関わりや学校教育での保育に関する学びなど、被養育・被保育体験以外の要因によって形成される可能性が示唆される。

#### 4. おわりに

本研究は、大学生の幼児期の被養育・被保育体験と幼児にふさわしいと考える関わり方の意識との関連、さらに幼児にふさわしいと考える関わり方の意識と実際の幼児への関わり方の認識との関連について検討したものである。その結果、幼児期の被養育・被保育体験は対象者の現在の「幼児にふさわしいと考える関わり方の意識」、つまり保育観と一定の関連を持つこと、被養育・被保育体験から影響を受ける保育観はそれぞれ異なることが明らかとなった。さらに、その保育観は対象者の実際の幼児への関わり方ともわずかながら関連があることが示された。このことから、対象者の保育観は、被養育・被保育体験と直接的に結びつくものは少なく、またその保育観は幼児への実際の関わり方に対して必ずしも直接的に投影されるものではないことが示された。

本稿では、異なる項目間での相関関係や、被養育・被保育体験、幼児にふさわしいと考える関わり方の意識、実際の幼児への関わり方の関連についてのモデル化にまでは至らなかった。今後は、その点について更なる詳細な分析が必要であると考えられる。さらに、幼児にふさわしいと考える関わり方の意識や幼児への実際の関わり方の形成にかかわる他の要因について明らかにすることも、今後の課題となるであろう。

上記の課題を明らかにすることにより、中学校及び高等学校における「保育」教育・学習や保育者養成に寄与するデータの提供を行うことが望まれる。

なお、本研究は、平成28年度上越教育大学卒業研究(成田鮎子)において、発表されている。

本研究にご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- (1) 吉澤千夏・成田鮎子(2018) 幼児期の被養育・被保育体験が養育者・保育者への好感度と自身の幼児との関わりに与える影響, 上越教育大学研究紀要, 38(1), pp.149-157.
- (2) 前掲(1)
- (3) 岡野雅子(2003) 青年期女子の子どもに対するイメージ-彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連-, 日本家政学会誌 46(1) pp.3-13.

- (4) 鯨岡峻 (2006) 『ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性』 ミネルヴァ書房 pp.58-114.
- (5) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』 pp.42-48.
- (6) 大竹美登利他 (2016) 『技術・家庭 [家庭分野]』 開隆堂 pp.42-49.
- (7) 佐藤文子, 金子佳世子他 (2016) 『新編 新しい技術・家庭 家庭分野 自立と共生を目指して』 東京書籍 pp.200-211.
- (8) 汐見稔幸他 (2016) 『新技術・家庭 家庭分野』 教育図書 pp.52-57.
- (9) 前掲 (1)
- (10) 前掲 (1)
- (11) 前掲 (1)

# The Relation between Experiences of Being Raised by Parents and Teachers in Early Childhood, Actual Involvement with Children, and Awareness of Appropriate Involvement with Children

Ayuko NARITA\* · Chinatsu YOSHIZAWA\*\*

## ABSTRACT

This study sought to clarify the relation between experiences of being brought up by parents and teachers, their awareness of what is considered an appropriate involvement with children, and their actual involvement with children. The students considered and evaluated themselves in terms of how they had been raised by their parents and nursery or preschool teachers, what they think is an appropriate treatment for children, and how they currently take care of children. The results are as follows:

1. Parents' expressive and affectionate relationships with their children during childhood, in which the children's pace is respected, were correlated with the same kind of relationship with children currently deemed appropriate by the subjects, but this correlation was not very high.

2. Teachers' safety-conscious interactions with children had a small correlation with similar interactions that the subjects considered appropriate for children. However, the relationship between teachers' respect for children and their support for a child's independence was not so high although it was significantly correlated with the same kind of relationship by the subjects thought.

3. Although being raised by parents and teachers affects the formation of a sense of appropriate involvement with children, the impacts that subjects experience are different, and in this respect, being cared for by parents or teachers is presumed to have different meanings.

4. Regarding "the awareness of involvement with children that is appropriate," which is the ideal when taking care of children, and "actual involvement with children," which represents reality, a correlation was observed between "interacting with infants expressively" and "interacting with infants at eye level." However, this correlation was not very high as well.